

巻頭言

2009. 4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

受験に勝つ

茗溪塾塾長 宇野 雅春

卒塾式から1ヶ月が経ちました。春期講習も終わり平常がスタートしています。花粉症からやっと解放される頃ですが、ここから季節が暖かくなると今度は、疲労感に悩まされることとなります。春期講習中も中学生、高校生は「忙しい!」を連発していましたし、事実、部活動の厳しい生徒は、あえぎながらの宿題消化だったと思います。

少子化から大学受験、高校受験ともに「全入」が取りざたされて「気楽」な風潮が流れる傾向がありますが、実態は全く違っています。特に今年の高校入試、東京都では中高一貫校の余波を受けて、都立高校全日制の一般入試の不合格者は1万1千人と20年ぶりに1万人をこえました。15万人の中学生がいた20年前につづく数字ですが、現在の受験生の数が半数以下に減っているこの数字は一層の重みを感じます。ちなみに都立高校の定員数は20年前の7万2千人強から2万9千人弱に減っていますから、今年の「受験生の3割が落ちる受験」というのは厳しさも今までにない段階といえなくもありません。

29もの都立高校が不合格者百人以上を出すという結果になっています。この背景には先に述べたように、中高一貫校増加があります。2010年度はさらに4校が加わりその分高校募集が減ることになります。不況も公立志向を後押しすると思われるし、来年は受験生の数が4000人近く増加することを考えると、上位校中心に厳しい受験が予想されます。私が一番危惧するのは、そういう状況に対して、あまり考えない生徒たちの状況です。というより考えなくても良い状況に置かれていた生徒たちといったほうが良いかもしれません。二極化といわれていますが、早くから受験を意識して準備する少数派と、何も考えていない多数派に分かれます。実際の受験になれば大騒ぎにはなるけれど、直面するまでは、自分のペースをかき回されたくない大きな「流れ」を感じます。一番安易な情報にだけしがみついているのですが、入試制度の複雑さがこの傾向にさらに拍車をかけているように思えてなりません。自分の受験の「特質」を知った上での受験勉強にいつ入るのか?このスタートの時期が微妙に勝敗を分けることは明らかです。

毎年毎年厳しい方向に状況が動くときは、相当指導の側の紐を締めないと、後手に回るというのが長年塾を運営しての実感です。今は引き締めの時期と考えています。あんまり気合が入りすぎて、「受験だけが人生でもあるまいし」という親には、饜蹙(ひんしゆく)を買うこともありますが、実際の入試を通じて実感していることを塾生に伝えていくことは塾の使命であり責任であると思います。受験の状況はどうなるのか? 楽な情報は伝わりやすく、厳しいという状況はなかなか伝わらないというのが現実です。

そんな中、ますます厳しくなる中学受験。やらされる勉強から進んでやる勉強に鍛え上げていく「努力」と「方法」が課題になると思います。

大学受験も案外知られていないのが、目標を持って取り組んだときには、厳しい現実があるということです。どこかに入れればという受験と違って目標のある場合は浪人することも多く、浪人した上で、やはり目標には達成しないことの方が多いということも知っておくべきでしょう。第一希望に到達する難しさはやはり「大学入試」が一番だと思います。

それでは「受験に勝つ」にはどうしたらよいのか? 答えは決まっています。早く目標を見つけ長期的に計画を立てて準備を積み重ねていくことです。勉強をいつ始めるのかに決められた制限はありません。基礎を積む時期は規則正しい学習のリズムを作り、レベルを上げるときは多少長時間の勉強も入れて、そしてラストスパートをかけるときは時期を逃さず徹底してやる、ということ。始めは順調でも、途中でペースを乱したり、ラストスパートが遅れたりしたのでは、合格は得らなくなります。陸上競技と決定的に違うのは、いつスタートしても良い、某先生の言葉を借りれば「フライングの許された長距離走」ということです。

スタート地点だけは、誰でも有利な条件をつくれるという事です。「受験に勝つ」を目標に、今年も一年頑張っていきたいと思います。